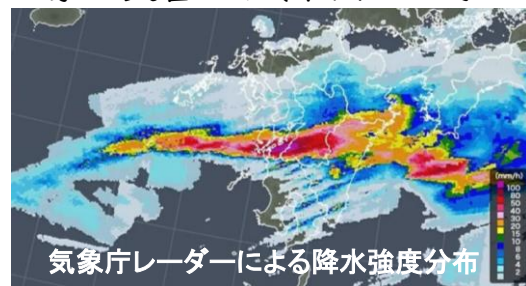




雨の季節がやって来ます

台風1号が発生し、昨日からは、「線状降水帯」のニュースもテレビから聞こえてきました。この「線状降水帯」という言葉はいつから注目されるようになったのかご存知でしょうか？以前から、集中豪雨が日本で発生する際に、線状の降水域がしばしば見られることは指摘されてきました。しかし、「線状降水帯」という言葉として、頻繁に使われるようになったのは、平成26年8月の広島県での集中豪雨以来だといわれています。そして、私たちがより身近に、そして恐怖を感じたのが人吉地方で発生した豪雨災害です（下図は当時の天気図）。この梅雨前線は人吉地方辺りに停滞していて、前線南側にある暖かく湿った空気と、北側にある冷たい空気がぶつかって、継続的に上昇気流が生まれ、積乱雲が発生しやすい状況となっています。人吉地方のケースでは、東シナ海上で次々と新しく発生する積乱雲が東へと進みながら強い降水域へとまとまっていき、線状降水帯が形成されました。積乱雲の発生・移動のサイクルが



気象庁レーダーによる降水強度分布

10時間前後維持されてしまったため、24時間雨量400mm超という大変な集中豪雨になりました。線状降水帯が球磨川の流域を覆うように発生し、猛烈な雨が降り続いたために、球磨川が各地で氾濫し、大規模な浸水などによる甚大な被害が発生しました。

今年も、梅雨に入ると7月までは前線が九州から本州付近に停滞するようになり、豪雨が起こりやすい時期がやっています。梅雨末期の豪雨はしばしば線状降水帯によってもたらされます。線状降水帯は1時間に100ミリ以上というような猛烈な雨を何時間にもわたって降らせることがあり、すぐに状況が悪化して、避難が困難になるということがあります。最新の気象庁の報道では、「顕著な大雨に関する気象情報」の発表基準を満たすような線状降水帯による大雨の可能性が高いことが予想された場合に、半日程度前から、気象情報において、「線状降水帯」というキーワードを使って呼びかけるそうです。この予想を生かして、なるべく家の近くで少しでも安全な場所を考えておくということも大切になります。梅雨明けまで、大雨に十分に警戒しましょう。

降水量の目安

降水量は、降った雨がどこにも流れ去らずにそのまま溜まった場合の水の深さのことです。例えば、上記人吉地方の「1時間で100ミリの降水量」は降った雨がそのままたまった場合、1時間で雨が水深10cmとなるということです。右表は気象庁からの引用をまとめてみたものです。どれ位の雨なのか、傘が必要か、外出を避けた方がいいかなどの参考にしてみてくださいはいかがでしょうか。

降水量	気象庁の表現	イメージ	車に乗るとき
1mm	記載なし	傘がなくても我慢できる	ワイパーが必要
2mm		傘が必要	
5mm		短時間でも傘が必要	
10mm	やや強い雨	ザーザーと降る地面からの跳ね返りで足元がぬれる	ワイパーを速くしても見づら
20mm	強い雨	どしゃ降り 傘をさしていてもぬれる	
30mm	激しい雨	バケツをひっくり返したように降る	高速走行時、車輪と路面の間に水膜が生じブレーキが効かなくなる(ハイドロプランing現象)
50mm	非常に激しい雨	滝の様に降る(ゴーゴーと降り続く)傘は全く役に立たなくなる	車の運転は危険
80mm	猛烈な雨	息苦しくなるような圧迫感がある。恐怖を感じる	